



『 秋分の日 』 祖先を敬い亡くなった人を偲ぶ日



9月23日は『秋分の日』です。元は、「秋季皇霊祭」と言い、歴代の天皇、皇后、皇親の霊を祀る宮中祭祀が執り行われてきました。そのことを受けて、「祖先を敬い、亡くなった人を偲ぶ日」になったのです。仏教では、真西に極楽浄土があるとの教えがあります。お彼岸は、太陽が真東から昇り、真西に沈んでいくことから、仏様に祈りを捧げるのに適した日とされたようです。祝日である「秋分の日」は、日付が変わる移動祝日でもあります。国立天文台が作成している歴象年表から、天文学的な秋分日を計算し決定しているのです。

また、「秋分の日」には、「おはぎ」を食べますが、漢字では「御萩」と書きます。秋に萩の花が咲くことに由来するとの説もあります。春のお彼岸の時期には「牡丹（ぼたん）」が咲くため、「おはぎ」ではなく、「ぼたもち」と呼ぶようになりました。

私たちが日頃、接している事柄には、成り立ちや意味合いが含まれています。それぞれの意味を知ること、物事に深く関わられるのではないのでしょうか。



彼岸花 「曼殊沙華」(まんじゅしゃげ)



「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉があります。夏の暑さも冬の寒さも、春秋の彼岸を境に次第に薄れていき、過ぎやすくなるという意味です。

秋のお彼岸頃に全国の田んぼのあぜ道や、墓地周辺などで咲き誇るのが「彼岸花」です。「曼殊沙華」(まんじゅしゃげ)とも言われ、真っ赤な特徴的な花びらが秋の風物詩になっているのではないのでしょうか。この彼岸花は、中国が原産地です。タンポポのように種が飛び自生したのではなく、球根を人の手で分けていき、北海道から沖縄まで分布したと言われていいます。彼岸花は、「まず花が咲き、後から葉っぱが伸びる」という、通常の草花とは逆の生態を持っています。球根のため、毎年決まった場所に花を咲かせます。また、真っ赤な花がとても印象深いため、記憶に残りやすいようです。

私たちの祖先が、子孫を絶やさぬようにと、何代にも渡って株分けしてくれたのかもしれない。

